

〈デカログ〉アンコール連続上映

	11/6(水)	11/7(木)	11/8(金)	11/9(土)	11/10(日)
Aプロ	5・6話	7・8話	9・10話	1・2話	3・4話
Bプロ	1・2話	3・4話	5・6話	7・8話	9・10話

〔上映時間〕

11/6～8&11/10	Aプロ	9:45	1:45	5:55	
	Bプロ	11:45	3:55	8:05	(終映10:00)
11/9(土)のみ	Aプロ	9:10	1:00	4:50	
	Bプロ	11:05	2:55	6:45	(終映8:35)

*入替制ではありません。

〔御入場料金〕

当日：一般 1,300円、学生 1,100円、情報誌割引各 100円引、シニア・
身障者割引 900円、夜間割引 700円、(Bプロの最終回のみをご覧になる方)
前売：一般 1,100円、学生 900円、3回券 2,700円

10作品一挙上映オールナイト

11月9日(土) 夜9:00スタート!!

① 第1・2話	PM 9:00～10:45
② 第3・4話	10:55～12:45
③ 第5・6話	12:55～ 2:50
④ 第7・8話	3:00～ 4:50
⑤ 第9・10話	5:00～ 6:55

〔御入場料金〕 当日3,000円均一、前売・情報誌割引2,500円

* オールナイトには満18歳未満の方は御入場になれません。

★前売券は文芸坐、チケットぴあにて発売中!!

(オールナイト上映のみ御入場料金が異なりますので御注意下さい)

11/6(水)～11/10(日)
期間限定につきお見逃さないよう!

B 文芸坐2
池袋東口 ☎3971-9424

あなたは私の
もうひとつの人生。



デカログ *10 kinds of love stories*

『トリコロール』『ふたりのペロニカ』の巨匠のすべてがここにある。世紀の最高傑作、1時間×10本の快楽。

キェシロフスキが贈る“十篇の愛の物語”

「ここ20年の間で1本だけ好きな映画を選ぶとすれば、それは間違いなく『デカログ』である。」——スタンリー・キューブリック監督

1989年ヴェネチア映画祭国際批評家連盟賞受賞/1988年ヨーロッパ映画祭グランプリ



監督：クシシュトフ・キェシロフスキ
脚本：クシシュトフ・キェシロフスキ
クシシュトフ・キェシロフスキ
音楽：ズビグニェフ・フレイスネル
(サントラCD/ポリグラムIMS)
ハバイズーション：ハヤカワ 文庫刊

主演：クリスティーナ・ヤンダ/ダニエル・オルブリスキ
ズビグニェフ・ザマホフスキ他
原題：Decalogue / 1988年/ポーランド映画
提供：テレビ東京/シネカノン
配給：シネカノン
イラストレーション：宇野重吉良

第1話「ある運命に関する物語」
第2話「ある選択に関する物語」
第3話「あるクリスマス・イブに関する物語」
第4話「ある父と娘に関する物語」
第5話「ある殺人に関する物語」

第6話「ある愛に関する物語」
第7話「ある告白に関する物語」
第8話「ある過去に関する物語」
第9話「ある孤独に関する物語」
第10話「ある希望に関する物語」

『トリコロール』『ふたりのペロニカ』のケシロフスキが贈る “十通りの愛の物語”



『デカローグ』を観るための5つのヒント。

その1 デカローグとは？

89年ヴェネチアを始めとする各国映画祭に熱狂と感嘆の嵐を巻き起こし、パリで公開以後2年間96週にも及ぶ驚異的ロングランを記録した『デカローグ』。全10本、10時間に及ぶこの作品には、『トリコロール』『ふたりのペロニカ』でヨーロッパを代表する巨匠の名を不動にしたケシロフスキのすべてが込められている。「デカ」は数字の“十”、「ローグ」は“言葉”。聖書に登場するモーゼの“十戒”を借りて、20世紀末に生きる人々の愛や孤独、そして希望を10本のフィルムの中に鮮やかに映し出したケシロフスキが贈る“十篇の愛の物語”——。あなたはこれの中に幾通りの愛を見つけられることができるだろうか？

その2 何を観るか何から観るか？

各作品はそれぞれ独立した一本の映画である。従って、どこから何本でも自由に観ることができる。だが、第一話から順に見ていくと、それぞれの作品がひそかに繋がっている事がわかってくる。どこがどう繋がっているかは見てのお楽しみだが、ほんの一例を挙げると、第一話で息子を失った父親は、第三話のクリスマス・イヴに憔悴しきった表情で再び登場するし、第五話のタクシー運転手は、第二話の主人公である夫婦の乗車拒否をしたあと殺されてしまう。第十話

の主人公が切手を買うのは、第六話の主人公である郵便局の青年からだ。そして第八話に登場する切手マニアは第十話ではもう死んでしまっているなど、ストーリーを時間的においかけていくこともできる。そう、登場人物たちは十作品の間を自由に行き来する。まるで『デカローグ』全体がひとつの巨大な広場であるかのように。

ここ20年の間で1本だけ好きな映画を選ぶとすれば、それは間違いなく『デカローグ』である。



第一話『ある運命に関する物語』(53分)
11歳の少年バヴェルは父親に似て、幼い頃からチェスやコンピューターが得意だ。しかしある日、彼が「死」というものに目覚めた時、思わぬ悲劇が引き起こされる…。生と死に揺れる少年の純粋な魂が胸を打つ、「十作品中、もっとも美しく残酷な作品」(仏/テレマ誌)。

第二話『ある選択に関する物語』(53分)
バイオリニストのドロタは夫の親友の子どもを身ごもっている。夫は瀕死の状態にあり、彼女は子どもを産むべきか、堕ろすべきか迷うのだが…。「しかし偶然は人間の感情や運命をも乗り越えていく。ケシロフスキが最後に用意する祝福は美しく強い女を真に美しい女にするであろう」(和久本みさ子/映画評論家)

その3 プレイスネル音楽の魅力 —作品を導く神秘的旋律—

『デカローグ』以降のケシロフスキの全作品をはじめとして、『ダメージ』『秘密の花園』『ヨーロッパ』他数多くの映画音楽シーンで今や熱烈なファンを持つプレイスネル。本作でもまた音楽のテーマが内容と深い関わりを持っているのは見逃せない。たとえば第九話、心臓の弱い歌姫が初めて作曲家ヴァン・デン・ブッデンマイヤーの名を口にする。この音楽の主題は第二話のバイオリニストと共に『ふたりのペロニカ』に引き継がれ、『トリコロール/赤の愛』で完結することになる。ブッデンマイヤーとは18世紀のオランダの作曲家ということになっているが、実はケシロフスキが創り出した架空の存在であるともされている。

ここに20年の間で1本だけ好きな映画を選ぶとすれば、それは間違いなく『デカローグ』である。

——スタンリー・キューブリック

第三話『あるクリスマス・イヴに関する物語』(56分)
クリスマス・イヴの夜。昔の恋人がヤヌスの家の呼び鈴を鳴らす。ヤヌスは愛する妻や子供を残して彼女と一夜を過ごすのだが…。「人も車も見えない深夜の都会を走り回る男女は、恋というものは純粋だが、つねに孤独に罰せられるという運命を象徴している」(辻邦生/小説家)

彼の作品はどれも好きだが、中でも『デカローグ』は特別だ。

——エドワード・ヤン

第四話『ある父と娘に関する物語』(55分)
母親を早くに亡くしたアンカは父親のミハウと二人暮らし。とても仲がいい二人は、お互い心から愛し合っている。まるで親子以上に…。『ふたりは今、大きな扉の前にして、その鍵を手にしている。だがそれを開けるのは彼らではなく、観客自身なのだ』(ケシロフスキ)

その4 全篇をみつめる 謎めいた視線

第一話の冒頭、凍り付いた湖のそばで一入、焚き火をする男。彼は実は『デカローグ』第一話から九話まで連続して登場する、謎めいた傍観者である。ある時は通りがかりの旅行者として、またある時は病院に勤める者として、あるいは授業に出席する一人の学生として。無言で主人公たちの心の動きをじっと見守るかのようなこの人物は、果たして天使だろうか、神だろうか、それとも…。そしてなぜ最終篇には姿を見せないのだろうか？

1本1本が素晴らしく、10本通して見ると一つの作品としてさらに素晴らしい。
私もいつかあのような方法で映画を撮りたい。

第五話『ある殺人に関する物語』(57分)
その犯罪は動機もなく、しかも計画的で残忍なものだった。若者は死刑を宣告される。弁護士のピョートルは彼をあくまで一人の人間として救おうとするのだったが…。殺される者、殺した者、そして殺した者を守ろうとする者——3人の主人公をケシロフスキが冷酷なまでに、そして限りなく優しくみつめた問題作。

第六話『ある愛に関する物語』(58分)
美貌のアーティストと彼女の向かいの部屋に住む19歳の青年。彼の一途な思いから二人は出会うが、ある日思わぬ事件が…。「乗り越えがたい距離を象徴するガラスが、この時代における恋愛の可能性を示しているのかもしれない」(鈴木布美子/映画評論家)

第七話『ある告白に関する物語』(55分)
マイカは10代の時に産んだ娘を母親エヴァに託し、自分は姉だと偽ってきた。家族は何事もない平穏な日々を装ってきたが、マイカはついに娘の本当の母親になるべきだ

偶然と必然の糸に紡がれた十の物語。ケシロフスキはあたかも人間の魂をレントゲンで撮影するかのような。

——仏/ル・モンド紙

と決心する…。『「娘として生まれた悲劇」がもっとも哀しい形で描かれた作品」(香山リカ/精神科医)

第八話『ある過去に関する物語』(55分)
大学で倫理学を教える人気教授ゾフィア。彼女は、若い頃ひとりのユダヤの少女の命を救えなかったという忘れられない過去に苦しんでいた。しかしある時ゾフィアは少女が生き延びていたことを知り、長い年月を経て二人は再会するのだが…。

第九話『ある孤独に関する物語』(58分)
優秀な心臓外科医であるロメクは、ある日突然性的不能を宣告される。妻に若い愛人がいることを知り、言いようのない嫉妬と絶望に駆られてしまうロメク。妻は夫を深く愛していることに気づき、彼に知られる前に情事を終わらせようとするのだが…。



その5 『ある愛に関する物語』と『ある殺人に関する物語』

88年に制作した第五話と第六話を再編集し、それぞれロング・ヴァージョンとして公開したのが『殺人に関する短いフィルム』、『愛に関する短いフィルム』である。第五話と『殺人…』はその構成が、第六話と『愛…』については特にラストが大きく違っている。ちなみに『愛…』に関してケシロフスキ自身は短い方を好んでいるとのことだが、さて、あなたはどちらがお好みだろうか？

——侯孝賢(ホウ・シャオシェン)

第十話『ある希望に関する物語』(57分)
父親の突然の死によって残された莫大な切手のコレクションは、想像を絶する価値をもっていた。中年サラリーマンの兄と人気ロックミュージシャンの弟は喜びもつかの間、切手をめぐる騒動に巻き込まれる…。『トリコロール/白の愛』主演のザマホフスキが、ここでは人気ロックバンドのボーカリストである弟を演じ、コンサート中では「十戒を破れ！」と歌っている。『デカローグ』随一のコメディであり、まさにラストを飾る傑作。

allez le voir!
agnès

ぜひこの映画を見に行ってくださいね！

——アニエス・b

